

空気も綺麗、皆さんの顔も綺麗になると思います。

失礼しました。(会場、拍手)

報告2

「小金井市における江戸野菜の復活」



土井利彦氏

NPO法人 ミュゼダグリ

ミュゼダグリの活動概要

ミュゼというのは日本語で言うと博物館。フランス語で農業博物館というかたちでNPOを作ってしまいました。私に与えられてテーマは江戸野菜で小金井を元気にするというもの。用意した原稿に乗っ取ってお話します。

江戸野菜という言葉が出てきていますが、江戸野菜を中心に話をすることはしません。小金井での試みは江戸野菜を復活させることが目的ではありません。復活させることを手段にしながら小金井市をどうやったら活性化するかを考えて活動しています。

江戸時代ことに吉宗の時代の小金井は小金井桜を中心とした江戸の観光地でした。観光地ではありましたが、江戸に野菜を供給するということはありませんでした。隣の市である小平の廻田めぐりだというところの野菜は供給されていたらしいということは記録にあります。小金井では供給していなかったそうです。なぜ野菜が供給されていなかったかということですが、小金井は乾燥地で野菜はあまりできなかったらしいのです。

さていま、小金井では農地が消えています。さらに、かつての農業共同体のような地域共同体もありません。さらにもう1つとして若い人たちの働き口が意味のない働き口しかない。それらを前提として、小金井をどのように活性化していったらよいかと考えました。

なぜ農地が減ったのか

小金井市は元々郊外のベッドタウンとして人口増加してきました。小金井に限らず東京郊外の町は1960年以降人口集中化をさせてきました。そのころ、農地はどのような風に扱われていたかという、宅地の予備軍としか考えられてきませんでした。1974年だったでしょ

うか、生産緑地法というのができました。そのときのやり方はいったん農地を都市計画化区域に組み入れた上で、特例措置としてあえて生産緑地法を作って、そこを農地として見なしましょうということでした。基本的には東京都の郊外、特に都市計画化区域の中の農地というのは、農地ではなく宅地としてみなされていて、ただ特例として生産緑地法で農地としてみなされているだけなのです。そういうわけでそれ以降どんどん農地が減ってきました。これは、それぞれの町にとってかなり驚異的な問題のはずです。というのも、元々江戸時代以降、日本の町というのは農地をくろみ込んだカタチで町ができていました。特に江戸を見ていただきますと確かに下町には長屋がいっぱいありましたが、大名屋敷では上屋敷下屋敷がありましたが、特に下屋敷ではその中に必ず農地が組みこまれていました。そこで大名がそれぞれ自分の国から持ってきた野菜栽培をしていました。そういう江戸の町だからこそ、幕末期に他国からやって来た人たちに江戸の町は美しい町、とても優しい町と認められていました。ところが、明治以降に都市計画の名の下に農地を町から外に追い出していき動きがどんどんできてきました。農地を追い出す一方でちゃんとした緑を残しておくということはせず、強固な土地所有制をつくり出しながら、かなり無計画な都市化がすすめられてきました。そのため、かなりつらい町ができたなという気がします。

住んでいる人々の意識

そういう問題と、後1つ、小金井のような郊外都市では制度的に農地が無くなる一方で、そこに住んでいる人たちはどういう人たちかと言いますと、1950年以降ベッドタウンとしてできていますから、元々そこに住んでいた村の人達ではありません。地元のことをちゃんと考えそこに住み着くかどうかほとんど考えない人たちが住みはじめたわけです。常に移転を繰り返す人たちの町になってしまいました。このことは、地域に関して自分たちのこととしていろいろな話をすすめていくのが難しい構造を生み出しました。

先ほど木俣先生が、日本はアメリカのいいところを学ばずにやってきてしまった、とおっしゃいました。アメリカの1番良いところと言うのは自治がしっかりしていることです。自分たちの町というものをこれほど大切にしている国はありません。アメリカの法律体系を見ますと、自分たちの一番身近な地域が1番大切にされています。そうやっているからこそ、自分たちの反対運動もはっきり出せる。「自分たちの町は自分達で救ってい

くぞ」という、そういう法体系がすごくしっかりしています。そこを間違えて今のアメリカの政府だけの話でアメリカを見ると、ほんとうのアメリカのことが見えなくなってしまう。このような自治という部分が残念なことに、特に明治以降の日本ではなくなりました。例えば平成の大合併というのがありますが、それは自分たちで決めたからこうなったということではなく、ほとんど国政の問題、国の財政上の問題でまとまった方が良さだろうと言うことでまとめたわけなんです。

意味のある働く場所を作る

第3に、働く場所の問題です。私たちの問題ではなく、次の世代の今の若い人たちの問題です。確かに今少し景気が良くなっていますが、そういう若い人たちはどこで働いているのでしょうか。特にフリーターとかニートと呼ばれる人たちも、決して働きたくないと思っているわけではないのです。彼らの働き場所があるかと言いますと、コンビニでアルバイト、いろんな派遣社員などがあります。それでは、その働きに社会的な意味があるかということ、おそらくほとんどありません。コンビニやファミリーレストランなど全国展開でやっている店舗は、そこでの最終的な目的というのは企業収益ですから、そこで1人1人のアルバイト社員に働く意味を与えるというようなことはありません。こういうことを話しているのは、ちゃんとした意味のある働く場所を町の中に作っていかないと、おそらくこれから先、町はどんどん崩壊してしまうだろうという危機感を持ったからです。

例えば、そういう小さなカタチで働ける場所、ご夫婦2人で小さなレストランを持ってもいいじゃないですか。小菅でも先ほどビスケットを作ったりしているみたいですが、そういった小さな働ける場所で町のなかに維持していく、しかもよそからやってきた人たちに買ってもらう、そういう構造ができないかなということが私の問題でした。

小金井市の資源とは

そこで、実は小金井で地域の資源を見直そうという考えたわけなんです。そこで地域の資源と言いましても、元々小金井みたいな所は、先ほどお話ししたようにベッドタウンですから、産業という産業も何もない。でも地図をよく見ますと、南北に大きな緑のかたまりがありました、特に北側の緑の固まり、小金井公園と言いますが、そこには「江戸東京たても園」という施設

があります。南北ともに4kmぐらいの町ですけど、そのなかに実に大学が3つ、旧国立の学芸大学そして農工大学、法政大学こういう大きな大学が3つ。そして市境まで含めると、東京経済大学があって文化女子大学、そして亜細亜大学、こんなにいっぱい大学があるところなんです。農工大学の中には繊維博物館というのがあります。そこでは江戸時代以来の織物技術を今でも傳承しております。そういう資源を見直しをしました。そういう資源を巧く活用して町が何とかならないかなと何度も眺めているうちに、「江戸東京たても園」と農工大の「繊維博物館」、この2つは両方とも江戸を扱っていることに気づきました。「着るモノ」と「たてもん」です。それに「食べ物」が加わると全体として江戸の生活文化の体験ができるのではないかと、ということで、町を活性化するのに「江戸野菜を復活する」ということを考えたわけなんです。

なぜ小金井市で江戸野菜なのか？

最初は江戸野菜を小金井で復活すると言ったときに、「何で小金井で江戸野菜なの？」という声がいっぱい上がりました。江戸野菜と言ったら今でいう東京23区、それも中心部で作っていた野菜のこと、それをなぜわざわざ小金井でやるのでしょうか。「江戸東京たても園」の建物だって、もともとそこにあったわけではなくて、移築させて1つの博物館にした。農工大の繊維博物館だって、傳承されている技術は、必ずしも江戸時代からずっと小金井にあったわけではなく、博物館という形であつめたものです。であるならば、野菜だって、伝統的なモノを育てて、伝統野菜の博物館を作ればいいじゃないかと考えたのです。ですから、江戸野菜で小金井を活性化と言いつつも、「小金井だから江戸野菜」ということから逆転して出てきたものです。これがもし小金井の隣の国分寺でしたら、もっと古い時代のことを考えればいいわけですね。もともと国分寺という歴史資産があるのですから、そういう歴史から何かを考えていく。それも1つの資源です。たまたま木俣先生が、「小菅村に日本村を作ろう」としています。では「小菅村が日本の象徴なのか？」と言われたら、そのとおりの疑問があります。でもここに昔からの日本のモノ・コトを巧くアレンジして集めていけば、それはそれでちゃんとした日本村になりうるわけです。ミュージアム構造をどうやって作っていくかという私たちの活動の事例が、小菅村の役に立つのではないかと考えております。江戸野菜の構想の詳しいことは資料を後でゆっくり読んでいただければ分かると思

ます。

どうやって稼ぐのか？ ～レクリエーションという商品～

わたしは少しシビアというか俗っぽい観点から、まず地域を活性化するのがいいのなら、どうやって稼ぐのかを考えなければならぬということから始めています。先ほど農地を残すと言ったときに、なぜ江戸野菜なのかということにもつながります。単に江戸野菜を残そうと言ってもむりです。わたしたちは、農業そのものをレクリエーション化し、レクリエーションを売るという考え方でやったらどうかということを提案しています。今の体験農園は、いかにもレクリエーションを売っているかのようなイメージがありますが、法体系の問題があって、ここでやっているのは生産物売ってそれに指導料をくっつけていくというやりかたです。ですから例えば体験農園をやっている方たちの収入は、よくて1年1反につき生産物販売が40～50万、それ+指導料で120万ぐらいです。都市の中で1000平方メートルの土地を使って、120万の収入で暮らして行けるかどうかの問題なのです。はっきりいいます。同じ広さで駐車場にすると売上げが500万円、固定資産税が100万円で、差し引き400万円が入ります。そうしたときに農地ではどうか、確かに税金は安い、ただみたいなモノですが、一生懸命やっても、普通の露地栽培である限りせいぜい100万円しか稼げません。そうすると、その農家の人たちは自分たちの経済のことを考えると、例えば農地を宅地転換して駐車場にしてしまった方がいいに決まっています。農地所有者がどうやって稼ぐかを考えた上で、どうするのかを考えないと肝心の「農地を残す」という目的が達成できません。今のところ生産緑地法の中で相続税猶予措置というものがあるのですが、レクリエーション農業を農業とみなすかどうか大きな課題と言えます。私たちはこれを進めるために特区提案をして、農水省や国交省の方たちとさんざん議論しました。彼らが言うには「そこがちゃんと耕作されていて、野菜などが植えられていたら農地とみなし、その行為を農業と見なす。レクリエーション農業も立派な農業経営（自分耕作）である。1人当たりいくら参加費を取ってもかまわない」ということでした。そのような統一見解が、どこの地域でも当てはまるかというところではありません。それぞれの地域の担当者や国税の担当者が農業経営と見なさないと外されてしまいます。その問題さえ解消されればレクリエーション農業が農業経営の新しい形の1つになり、都市の農地を守る大きな武器になりうるわけです。

さて、江戸野菜との関係です。伝統品種は簡単に作られません。収量が少なく、育ちも一斉ではありません。たとえば、今の小松菜は本当の小松菜ではなくチンゲン菜が半分以上入っています。昔の小松菜は、かなり柔らかく油炒めなどには不向きで、江戸雑煮などで使われていました。このように品種そのものが大きく変わっています。伝統品種を残すためにもレクリエーションは役に立つと思いました。レクリエーションならば、難しさにかかわらずとにかく変わったもの、おいしいものを作った方がおもしろいに決まっています。レクリエーション農業に伝統品種を巧み組み込んでしまえば、コスト無視で種子が残せません。レクリエーションと江戸野菜は、このようにつながってきます。

レクリエーション農業をどう展開していくかというのと、とにかく楽しんでもらえなければだめです。例えば小金井は昔から乾燥地帯ですから小麦を作る。ただうどんを作るだけでは、おもしろくないから、小麦から育ててみよう。具もいろんな伝統野菜をつくって、最終的にけんちんうどんを目的にしよう。その目的に向かって、全体をレクリエーションとして楽しんでもらう。さらに、けんちんうどんをつくる時に、器も自分たちで作る、といったレクリエーションを仕立てて行けばいい。

このようなことは小金井では、ちょっと難しいのですが、小菅村では簡単にできると思います。このように、最終的に自分たちにおもしろさが戻ってくるレクリエーションを考えています。そういう構造を作って、農家の収入を高めようというのが私達の江戸野菜の活動です。あくまで都市に農地を残し町を活性化することが目的です。

木俣先生は、非常に真面目に日本村構想を進めています。ですから、私たちがお手伝いするとしたら、その真面目な日本村構想の中で、みんなが楽しめて、多くの人達がやって来られる場がどうやったらつくれるかを皆さんに提案したいと思っています。（会場、拍手）